

の努力と苦労は大変なものであったと推察される。これらを通覧すると、記事の区分がⅠ～Ⅴ部門の論文集に比較してかなり多くなっている、学会誌との区別がつきにくいところもないとはいえないが、Ⅵ部門の読者層とみられる会員の人数と職種の高さを考えればむしろ当然かもしれない。しかし、創刊当初と同程度の編集努力を継続させることは容易ではないし、そうでなくても論文集は編集委員会の意図したものから会員のものへと成長すべきであると思われるので、今後は一般会員からの投稿の増加を図る必要があろう。それには、論文集と会誌の大きな相違が問題を深く掘り下げるといふ点にあることを強調したうえで、投稿原稿の区分を、たとえば論文、工事報告、技術報告、資料、などのように明快にして原稿をまとめやすくするのも一案ではないかと考える。

(筆者・Noriaki IWASAKI, 東洋大学教授 工学部土木工学科)

しい論文集である必要はない。

このような観点から、土木施工研究委員会の活動報告は意義深く読ませて頂いた。特に、建設業に研究機関の委員を含めた活動から何が生まれるかということに、大きな期待をもっている。さらに今後、誌上で多くの立場の人々が議論するためには、問題提起というか質問のようなものを載せてもよいと思う。そして、その解答となるような論文が出るようならば大成功である。もう1つ、論文集への貢献に対して、土木関係の資格審査などに考慮するというのは行き過ぎであろうか。

いずれにしても、4号の段階ですでに互に関連性のある論文も掲載され、この分野の知識・技術の集積が始まっているのを感じる。

(筆者・Masahiko ISOBE, 横浜国立大学助教授
工学部建設学科)

論文集らしからぬ論文集

磯部 雅彦



第Ⅵ部門の論文集もすでに4号まで発行され、総頁数にして623頁にもなった。この機会に目次を並べて見ると、論文集なのか学会誌なのか一見区別がしにくいような内容となっているというのが第一印象である。展望・解説あり、対談あり、さらにはこのような「つうしんらん」ありで、私の専門である第Ⅱ部門などと比べると、相当型破りな論文集といえるだろう。しかし、だからこそ私でも読んでみようという気になるのだから、第Ⅵ部門小委員会の創意・工夫が当たっているわけである。特に、招待論文や展望などで、それぞれの分野の歴史・現状を知ることができるのはまことに有難い。

最近、随分世の中が理屈っぽくなり、研究・調査・計画・設計・施工の一貫性が強く求められるようになったようである。このためには、それぞれの分野の人々の知識・興味の対象が、立体航空写真の場合のようにオーバーラップする必要がある。そこで、第Ⅴ部門までのいわば部分品と設計・施工という完成品とを結びつけるための橋渡しの役割を担うのが第Ⅵ部門であろう。したがって、いわゆる学問的研究と現場での実務とが触れ合う場となるのが理想であり、このためには必ずしも論文集ら

第Ⅵ部門論文集への期待

魚本 健人



第Ⅵ部門の論文集が発刊されてから、もうすでに2年が経過し、4冊が出版されている。最初は論文も招待論文が多かったが、投稿論文も徐々に増えており、私も論文編集委員会の一員として、喜ばしく思うと同時に担当委員諸氏の努力が実りつつあるものと考えている。

第Ⅵ部門の論文集は、従来の部門だけでは対処しきれないような境界領域の問題や、新たな学術研究問題を主に取り扱うことになっており、今後行われる新たな研究部門を一手に引き受ける重要な部門である。今日、大きなプロジェクトとして行われている多くの土木工事等では、土木、機械、電気等のハードウェアから、計測、評価、解析等のソフトウェアに至るまで、幅広い情報と各分野を結合させる技術・知識が必要とされる。第Ⅵ部門の論文集は、このような場合に得られる技術・研究結果を報告する場の1つであるといえよう。

第Ⅵ部門に関する技術・研究を論文として発表する場合に大きな問題となる点は、その内容の多くが、関係者にとって最新のノウハウに属するものが多く、また、他の部門に比べ実証するに足るだけのデータ等を提示しにくいこと等であろう。前者については、特に公共性の高